

旭ろうさい病院ニュース

病院情報誌 第183号

令和5年12月1日発行

発行所：旭ろうさい病院

〒488-8585

尾張旭市平子町北61番地

TEL 0561-54-3131

FAX 0561-52-2426

当院での「認知症ケア回診」の現状について

（抗認知症薬の功罪も？）

脳神経内科 主任部長 長江 雄二



現在、旭ろうさい病院では月2回、第2・第4水曜日に「認知症ケア回診」を行っています。これは、脳神経内科医師（長江）と看護師複数名、作業療法士、薬剤師（病棟担当）、医事担当と各病棟を回り、認知症患者の対応などで困っていることに対して、処方やアドバイスを各専門家から指示をしていくというものです。

ほとんどの場合、いわゆる『せん妄状態』で最も多いものは環境変化に伴い現れる『入院せん妄』です。認知症患者さんは通常、毎日単調な生活を送っており、「入院」という環境変化にすぐには適応出来ません。夜、トイレを探して徘徊し、他人の部屋やベッドへ入り込んでしまったり、入院したことを忘れて家に帰ろうとして騒いだりしてしまいます。それを無理に止めようとするとうるさく出したり、時には暴力的になったりもします。

こういう状況にどう対処するかですが、まずは夜間の睡眠を確保します。夜眠れないといわゆる精神症状は悪化してしまうからです。また日中ならば看護師などの人出も多く、何とか対処出来ることも夜間は夜勤看護師が少なく対応出来ないからです。具体的にはまず夕方に向精神薬（セロクエル、リスペリドンなど）を内服してもらい、さらに寝る前に入眠剤（デエビゴなど）を追加します。向精神薬は効果が出るのに若干時間を要するので、早めに内服してもらうのです。注意事項として、ベンゾジアゼピン系の薬剤は眠れば良いのですが、眠らないとかえって興奮性を惹起することがあるので、『せん妄』にはあまり使用しないほうが良いと考えます。

一方、日中から興奮性が強く、昼間から鎮静が必要な場合は、抑肝散やグラマリールを1日2～3回投与したり、さらにひどい時はセレネースを1日2～3回投与したりします。それから前に書いたような眠っていただく処方も出します。

もう一つ忘れてならないのが、精神的に興奮を惹起する薬剤があれば中止することも重要です。多くの患者さんには、すでに認知症の病名がついており、抗認知症薬が処方されています。話を伺うとずいぶん前からずっと続けている場合が多いです。自宅で単調な生活をしているときは問題ないようですが（時に最近怒りっぽくなっていたということもありますが）、環境変化で興奮性が出た場合にはこれ（抗認知症薬）が逆効果になります。中止した後かなり穏やかになることがほとんどです。また抗パーキンソン病薬も同様に精神症状を悪化させている場合があり、減らすことで改善することが見られます。

『せん妄』はその後の経過を見ていると、多くの場合は数日でかなり回復し、薬剤（鎮静剤）の減量が可能です。しかしながら、抗認知症薬については、中止しても何ら認知機能が悪化するわけではありません。現在流通している抗認知症薬はあくまで進行を遅らせるのであって、改善する訳ではありません。必ず飲まなければならない薬剤というわけではないのです。もし普段でも抗認知症薬を続行中に「怒りっぽくなった。」とか「勝手に出て行って迷子になった。」等の陽性症状が悪化した場合は中止することも必要かと考えます。



薬剤部の取り組み

薬剤部長 長嶋 一泰

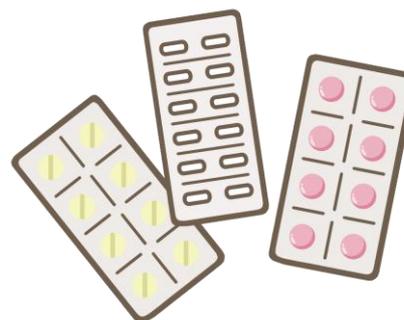


旭ろうさい病院では、一般医療を基盤とした勤労者医療による治療就労両立支援、また急性期医療・救急医療の機能を担うことで地域医療の一端を地域密着型病院として多職種と連携をとり、様々な取組が行われています。

当薬剤部では、入院前から退院後までの流れにおいて、患者さんが、安心して薬物治療が行っていただける環境の構築を目指しています。

入院前に手術検査予定患者さんに対して、術前・検査前中止薬の確認、入院時には患者さんの使用薬剤の確認である持参薬鑑別を行い、服用状況を確認しています。

入院中の患者さんに対して、薬剤部内では、処方箋、注射箋から得られる処方内容、患者さんの年齢、体重、検査値などに加え、必要に応じ電子カルテより詳細な内容を確認しながら調剤、監査した後に病棟に使用薬を払い出しています。病棟では、病棟毎に配置された専任の薬剤師より、使用薬の中止・再開などの使用状況が把握され、患者さんのアドヒアランス向上、副作用、相互作用の早期発見など、医師、看護師、他の医療職との連携を取り、的確な治療の支援を行っています。また、緩和ケアチーム、栄養サポートチーム、感染対策チーム、認知症ケアチーム、糖尿病ケアチームなどの医療チームの一員として薬学的視点より、患者さんの治療に積極的に関わっています。



退院時には、お薬手帳などにより、患者さんが薬の管理や服用方法について理解度を確認し、取扱の注意点を指導することで患者さんが適切に薬の服用ができるように取り組んでいます。

抗がん剤治療患者さんに対しては、治療が計画どおり行われる様に、投与量、間隔、検査値等も含めて総合的に確認し、安全キャビネットという機器を用いて、安全かつ無菌的に調製を行っており、患者さんが安心して治療が受けられるように取り組んでいます。

外来においても、治療就労両立支援も含め、がん化学療法患者さんに対して薬学的視点から、治療状況について定期的な介入を行っています。

その他薬剤部では、院内化学療法委員会の一員としてホームページへの診療科別がん化学療法のレジメンを公開したり、薬剤部主催の講演会に携わっています。講演会の一つとして瀬戸旭長久手薬剤師会、守山区薬剤師会と定期連絡会を実施し、薬薬連携により地域密着型病院として取り組んでいます。

今後も患者さんを中心とした医療を提供する病院の一員として支援に努めていきますので、旭労災病院薬剤部を、どうぞよろしくお願い致します。



薬剤部の皆さん



年末年始 外来休診のお知らせ

令和 5 年 12 月 29 日 (金) ~ 令和 6 年 1 月 3 日 (水)

なお、救急外来は平常どおり対応を行っておりますので、
内科・外科系のホットラインをご利用ください。
何かとご不便をおかけしますが、よろしくご配慮の程お願い申し上げます。

